

パフじいちゃんの すてきな日 クリスマス



原作 ● トルストイ

再話 ● ミグ・ホルダー

画 ● ジュリー・ダウニング

訳 ● 女子パウロ会

パロフじいちゃんの すてきな日 クリスマス



原作 ● トルストイ
再話 ● ミグ・ホルダー
画 ● ジュリー・ダウニング
訳 ● 女子パウロ会

女子パウロ会

む

かし、ずっとむかし、ロシアの小さな村でのこと、
年とった くつやさんがいました。
村のだれもかれもが、パノフじいちゃん
よんでいました。

みんな このおじいちゃんのこと とても好きだったのです。
パノフじいちゃんも持っているのは、
村の通りがよく見える 小さなひとへやだけ。
じいちゃんは、そこで、ねて、おきて、
くつやのしごとをするのです。
おかねもちとはいえないけれど、びんぼうともいえませんね。
くつをつくるとうぐと、
りょうりしたり、手をあたためたりする ストープも一つ。
すわたり、はたらいたり、いねむりしたりする、
いすも一つ。
しっかりしたベッドには、パッチワークのかけおとん。
くらくなったときのための 小さなランプもありました。
くつのしゅうりを たのみにくる おきゃくさんも
たくさんいたので、パンや、コーヒーや、ミルク、それに
スープにいれる キャベツ かうだけの おかねもありました。
だから、とてもあわせてと おもっている
パノフじいちゃんのは、小さなめがねのレンズのおくで
いつも きらきら かがやいていました。
パノフじいちゃんは、うたったり、くちよえをふいたり、
通りをいくひとに 大きな声で あいさつしたりしました。



でも、きょうは ちょっとちがいます。
 パノフじいちゃんは、しごとばの まどのところ
 にさびしそうな かおで 立っていました。
 ずっとまえに なくなった おくさんのことや、
 ひとりだちして とおくにいった むすこ、むすめたちのことを
 おもいだしたのです。その日はクリスマスイブで、
 かぞくといっしょに たのしそうに 家にいたり
 通りをあるいているひが おおぜいいましたから。
 あかりのついた 家いえからは、こどもたちの わらい声
 がきこえ、まどの すきまからは、にくをやく おいしそうな
 においも ながれてきます。
 「あーあ」と、パノフじいちゃんは、ながいあごひげを
 ひっぱりながら たのめきをつきました。そして、
 ゆっくりと ランプをつけ、高いなから ちゃいろの
 古い本をとりました。
 それから、さぎょうだいのはこりをはらって、
 ストープにコーヒーポットをおき、
 火をひらきすに こしかけて、ゆっくりと 本をひらきます。



パノフじいちゃんは、がっこうにいったことがないので、
 じょうずには よめません。ゆびで もじをたどりながら、
 声を出してよみます。それは、クリスマスものがたりでした。
 イエスさまのたんじょうのお話です。
 イエスさまは、どこで、どんなふうに、
 お生まれになったのでしょうか。マリアさまと、ヨセフさまは、
 たびのとちゅうで、やどやは どこもまんいん。とめてくれる
 ところがありません。やっと見つかった うまやで、
 イエスさまは お生まれになったのです。
 「ああ、もしここにきてくださったら、おしのちゃんとした
 ベッドに おかせてあげたのになあ。あったかいパッチワークの
 おふとんを かけてあげて、ね。いっしょにあそべる
 ちっちゃな子がいたら、どんなにいいだろう。」
 パノフじいちゃんは、もっとあたたかくしようと、
 ストープの火を 大きくしました。
 外は、また きりがふかくなったらしく、くらくなので、
 パノフじいちゃんは あかりをつけ、カップにあついコーシーを
 ついで、本のつづきを よもうとしました。





とおい東の国の、かしこい学者たちが、
すくぬしのたんじょうを知り、すてきなおくりものをもって、
おがみにきた話をよみました。

「もし、イエスさまがここにきてくださっても
わしには、さしあげるものが なにもないなあ。」

パノアじいちゃんは ためいきをついて、それから
ぱっと目をかがやかせました。

うれしそうに 立ちあがって、たなの上から
ほこりだらけになった 箱をおろしました。

箱をあけると、そこには、かわいいくつが いっそく。
これまでに いちばんよくできた くつでした。

「そうだ。これをあげればいいんだ。」

パノアじいちゃんは、また本にもどりましたが、やがて
こっくりこっくり……本はじいちゃんの手からすべりおち、
じいちゃんのおむろが はじまったようです。





外のきりは こくなり、そのきりのなかを ぼんやりと
かげのように ひとが 通りすぎます。
とつぜん、「じいちゃん、パノフじいちゃん」という声^{こゝろ}がして、
パノフじいちゃんは とびあがりました。
「だれだい？」パノフじいちゃんは、しろいひげをふるわせて
たずねます。だれも見えません。でも、声はまたいきました。
「パノフじいちゃんは、ぼくにいたかったんだらう？
おみせに きてほしかったんだらう？ ぼくに プレゼント
したかったんだよね。あすのあけがたから ゆうぐれまで、
よくこの通りを見ていてね。通りながら、ぼくはだれだか
いわないけど、きっと、ぼくだと、見わけてね。」
そして、すっかりしずかになりました。

パノフじいちゃんは、目をこすって、おきあがり、
ひとりごとを いいました。
ストーブの火はよわくなり、ランプのあぶらもつきえています。
「イエスさまだったのかな。たぶん、ゆめだったんだらう。
でもいいや。イエスさまが、クリスマスにきてくださるのを
よく見るぞ。でも、どんなすがたで きてくださるかなあ。
いつまでも こどもだったわけじゃないし……
ひとびとは、王さまだとか、かみさまだとか いっていたしね。」
じいちゃんはあたまを よって、ゆっくりといいました。
「おやおや、とてももういよかく 見なければいけないな。」



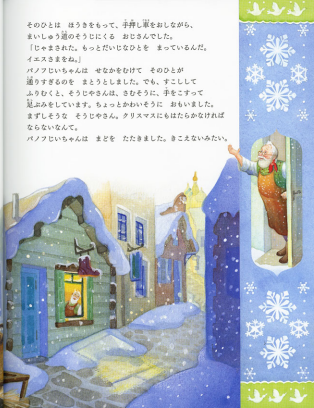
その夜、パノフじいちゃんはベッドにいきませんでした。
まどのほうをむいて、いすにすわり、
だれかが 通りかかるとを じっとまらしました。
まだ、だれもきません。

「クリスマスの朝だ。おいしいコーヒーをいれよう。
ストーブには、しっかりせきたんをじゅんびして、
あつあつのコーヒーを 大きなポットにじゅんびするぞ。
それからずっと まどの外を見ているのだ。きょう
イエスさまが きてくださるといいな。」
きげんよく ひとりごとをいながら、
パノフじいちゃんは まらしました。
あっ、だれかきた。つよいかげがふいている 道のむこうに、
ひとのすがたが 見えました。パノフじいちゃんは
わくわくしながら、こおったまどガラスに かおを
おしつけました。「きつと、イエスさまだぞ。」
ひとのすがたは ととき たちどまりながら
ちかづいてきました。でも、ざんねん。

そのひとは ほうきをもって、手押し車をおしながら、
まいしゅう道のそうじにくる おじさんでした。
「じゃまされた。もっとだいじなひとを まっているんだ。
イエスさまをぬ。」

パノフじいちゃんは せなかをむけて そのひとが
通りすぎるのを まとうとしました。でも、すこして
ふりむくと、そうじやさんは、さむそうに、手をこすって
見ふみをしています。ちょっとかわいそうに おもいました。
まづしそうな そうじやさん。クリスマスにはたらかなければ
ならないなんて。

パノフじいちゃんは まどを たたきました。きこえないみたい。



パノフじいちゃんは、声をあけて、外にでました。

「おーい、おじちゃんよう。」

そうじやさんは、しんばいそうに あたりを 見まわしました。
こういうしごとのせいで、ひとから もんくをいわれることもよくあったからです。

パノフじいちゃんは にっこりして いいました。

「コーヒーでも いっぱい どうだね。」

はねまで こおっているように 見えるよ。」

そうじやさんは 手押し車をおくと、

「ありがとう。いいんですか？ ほんとに ごんせつさまと
いいながら、みせに とびこんできました。



パノフじいちゃんは ストーブの上のポケットから
あつひコーヒーをついであげました。

「ちょっとだけど。きょうは クリスマスだものね。」

「ああ、これが、あっしのもらえるクリスマス・プレゼントの
ぜんぶです」と、そうじやさんは、鼻をすすって いいました。
ストーブであたたまっている そうじやさんのよごれたふくから
じょうきがでて、すっぱいにおいがしてきました。

パノフじいちゃんは またまどのところにもどり、じつ
通りをながめました。

「おきゃくさんを まっているんですかい？ 通りには、
あっしがいみせんでした」がと、そうじやさんは
ふっさらばうりに たぎねました。

パノフじいちゃんはくびをふり、「えーっと、イエスさまのこと
してはいますか？」とききました。

「かみさまの み子のことですかね？」

「そう、きょういらっしやるんです。」

そのこたえをきいて、そうじやさんはとてもびっくりして、
パノフじいちゃんのほうを 見ました。

パノフじいちゃんは、これまでのことを ぜんぶ話しました。

「それで、イエスさまをさがしているんですよ。」

そうじやさんは、からになったコップをおき、ドアのところに
いきながら、いいました。「うんよく見つかるとういいますね。
コーヒー、ごちそうさまでした。」そうじやさんは ほほえみ、
それから いそいで通りへでて、手押し車のところへもどりまし
た。

